珍著各種第一號
陸士人著
ヘラ〳〵草紙

落花狼籍

迺羅く草紙

作憚口上

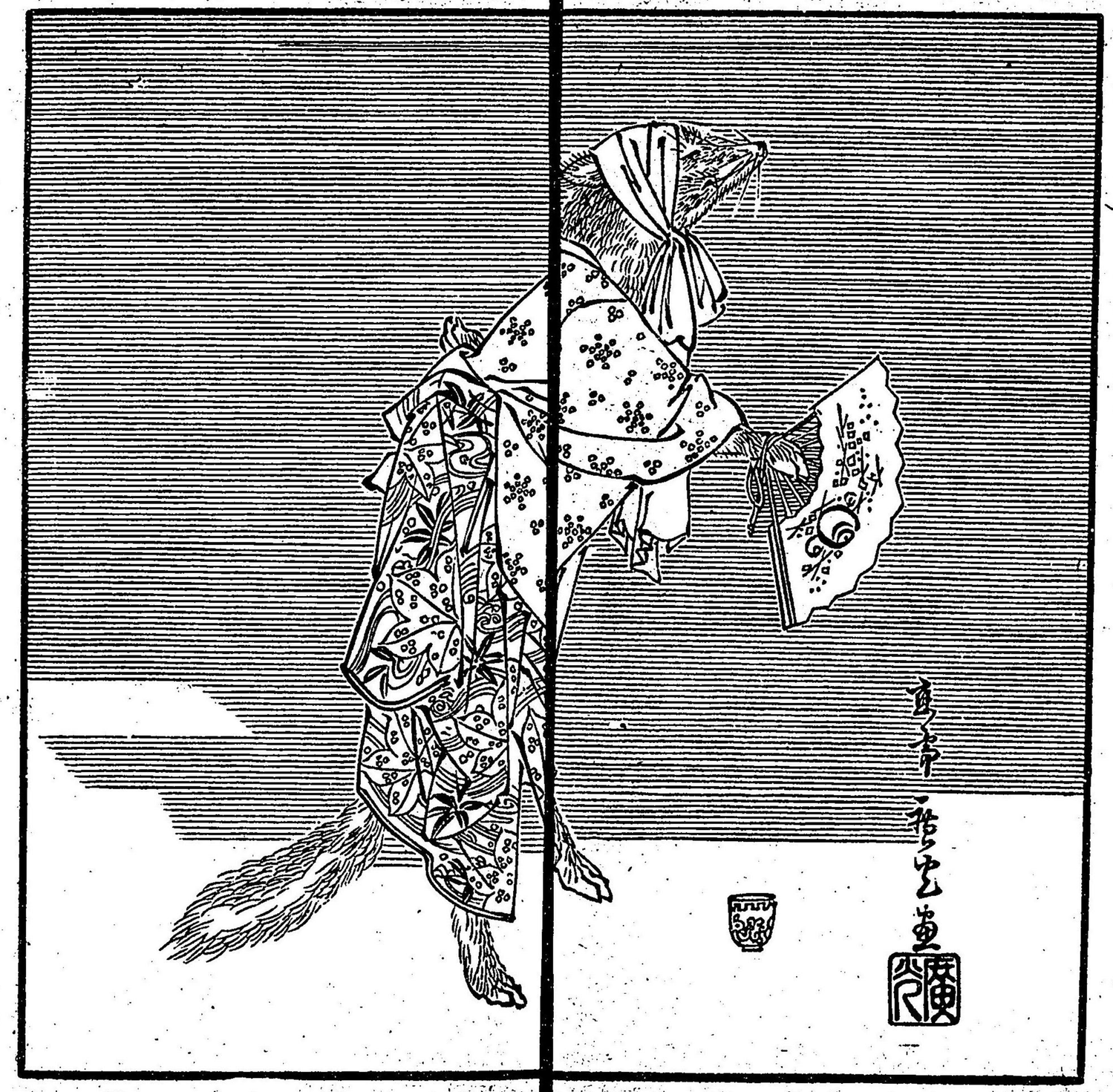
落花狼籍へら〳〵草紙ハ太夫元必死の力を揉み出して極〳〵珍無類の面白き小説を組立新文章を愛讀の旦那樣方の瀏覽ゟ供せんとの心掛に御座候處へら〳〵の元祖ときの屋重尾一座より這度の鶴の席壓死者諸君へ供養ゝ爲め是非〳〵罪障懺悔の一幕を仕立追善踊を相勤め度就テハ太夫元ゟ於て脚本の草稿を認め呉れる樣申來たりも何とも致さず候得共他人樣の小指程も書けなひ癖ゟ小説も鳴呼がましやと舞臺方其他の誹謗も道理至極併し之を此儘措くも何となく心殘りして極樂淨土ゟ落つかず迷ふた〳〵

明治三三

と漂然書きの脚の無ひ脚本を然かも一幕御覧よ入るゝ事と致し候尚次の代りよゝ虚で無ひ面白き小説を若手揃よて御覧よ入れますれば何卒永當々々御引立の程伏て御願申上候

各位

大夫元敬白



藝人	役割
一志摩田秋正	ときの屋愛吉
一佐久間髯尾	ときの屋重尾
一幡多助三郎	ときの屋小三
一浪花小僧波吉	ときの屋房吉
一藝妓峯吉	ときの屋小花
一中村鶴三郎	ときの屋小米
其他職人二名	
下女三名	

サーサ評判の常の屋重尾一座のへら〳〵踊サーサー
錢々々サ御這入やす〳〵

南地宗右衛門町三濱屋表口の場

本舞臺三間の間手摺附の二階○軒口三濱屋と印したる柿色の暖簾○上手格子の間柱に三濱屋と書きたる掛行燈○下手宗右衛門町遊廓の遠見○都て南地三濱屋表口の場○幕の内より紺の印入の法服○職人の拵へせる口△の男二人辨當を持ち下手より幡多助三郎散髪髪東の印入りたる法服○短襦袢草鞋を穿き○宜き所より警何號の印入りたる提灯を燭せる挽車を置き○車夫の拵へよて○各〳〵立懸り居る○中央より浪花小僧波吉○絹の大福袍紺絹足袋の着附宜しく○俠客の拵へよて職人を宥め居る此見得宜しく鼓入の賑かなる唄よて幕明く○口「揖棒を他人の明き肩目奴チト氣を注けて曳かんカイ

△「揖棒を他人の脚に打ち當てゐがつて……頓痴氣奴

波「ヤイ〳〵待つて下さひ揖棒を當てたのハ此人が惡ひよは相違なひ夫故に

とそ斯樣よ謝り入つて居ます

△「ドーゾ了見して下さひ

他人に怪我さして謝れば夫で濟むと思ふカイ阿房

波「サア濟むの濟まぬのでハ無れども何も知つて仕た事と云ふでハ無ク殊よ夜中の事でハあり過失と云ふものハ誰しもある中の事大低あらモー堪忍して遣つて下さひオイ車夫モー一偏謝辭を云ふが宜ひ

助「ヘイ有難ふ御座ります御兩人の衆エライ疎勿を致しまして相濟ませんが何卒御許しなさつて下さひまし

△「エーならぬわひ他人の身体よ傷を附けて疎勿した相濟みませんで濟む位なら裁判所や警察署ハ設立ては無ひわい

口「そうだ〳〵是から警察へ曳張つて行くが宜ひ青色ひ顔ハあがつて眞個よ殺生な事

仕らすィッソの事打つ擲ひてやれト色々仕打ある　波「そんあら是程に謝辭云ふても堪忍せぬと云ひなさるあ宜し

□△「エー　波「御前さん等の望みの通り警察へなと裁判へなと行きまーやう他人よ傷を着けたのが罪人なら他人を阿房とか頓痴氣とか悪口を吐くのも同じ罪人

四

□△「ウ……波「サー車夫此波吉が從ひて居るから何も心配する事は要らぬ覺悟して往くが宜ひ往つて白黒を附けて貰らわうサー御両人さん、ト□△両人を連れ往かんとする両人困却の仕打

△「ウ……ィヤ事が奇麗よ分りさへすれば別に警察へ行かひでも　波「宜ひと云ひなさるか夫りや何よりの僥倖だ你も望んで警察よ往き度ふとは無ひ畢竟御前さん方が了見ならぬと被仰るからの事茲よ金が二圓あるから是で傷の養生して今日の所は你に面じて了見して下さひ　波「疎勿をして相濟みませんが　波「疎勿した相濟みふせんで濟む位なら警察署や裁判所へ設立ては無ひわい　□、△「ウ……ト此内波吉金を取り出し兩人へ渡す兩人色々仕打あり金を受取りソコ〳〵にして下手へ這入る　波「人の弱目を附け込んで金よ仕ようと思ふチョッ仕方の無ひ奴等だ　助「親方實に御禮の申様も御座りません殊よ一圓と云ふ御金子まで　波「何もそんなに禮を云ふにも及ぬ事、ト此内波吉助三郎挽車の提灯よて顔見合せ波吉吃驚せ〳〵仕打　波「ヤア御前さんも何やら見た様な顔……ウン忘れもせぬ三年前然も十月二日の夜不圖した事の意地づくこの紀州和歌山の町端よて仲間の者よ打擲され命も已よ危き所通り掛つた一人の旅人仲間の者に詫を入れ歸した後で喧嘩の

五

仕末身の上までも問わるゝ儘包まず打明け話したれば迚も此地に居られぬ身体なら此金を以て大阪に出で一ト奮發するが宜ひと惠まれし五圓の金子見ず知ずの私に……アゝ世には慈け深ひ人もあるものと泪乍らに大阪に出て或且那の助けよ依り仕馴れた業の大工職夜の目も寢ず働ひたので今でゝ頭梁とか親方とか云われる樣よなつたのも全く其旅人の御庇蔭其時ゝ姓名も御被仰らざりし故不本意乍ら御分れ申したなれど其容貌ゝ片時も忘れる暇ゝ……車夫の顏を不審そうよ眺むる仕打あつて波「今御前さんの顏を見れば寸分違わぬ顏容姿着附仕振ゝ變つても若しや其時の旅人は　助「成程和歌山の町はづれよて商賣用の歸り途余りの事の不愍さよ少しの金を惠んだが其時の若ひ衆が親方さんであつたのか　波「ヤッパリ貴

公樣で御座りましたか道理で車夫よゝ似合しからぬ順常さと思ひましたが你を御救ひ下さつた其時の御姿とは打て變つた此御風樣之よゝ何ず深ひ仔細ず御座りましやうト此時助三郎面目無き思入れある二階よゝ志摩田秋正奉書紋付の揃へ着附宜しく藝妓峯吉幽禪縮緬よ襦子の帶兩人共波吉助三郎の話を聞き居る　波「何も面目無ふ思ゝ召す事ゝ御座りません失禮な申分乍ら是が元々の御身分なら御恩報じも出來惡ひが斯ふ云ふ事に御成なされておそ私の大恩が少しなりとも送れますと云ふた所が茲ゝ道中幸ひ此三濱屋ゝ下座敷よて何かの樣子を承りましやう、ト賑かなる相方にて兩人暖簾の内へ這入る二階よては此家の仲居銚子を持ち出で　峯「且那熱ひのが參りました、是よて三人盃事宜しくあつ

て　峯「幾時も乍ら波さんの潔白とした事動よい惚れやれ致しますわいな　仲「真に左様で御座りますわいな　志「頭繋の侠氣よは毎度感じ入るわいシテ又彼の車夫も滿更の漢人らしひが　峯「サー儂も其車夫の聲が何やら　志「エー　峯「イーエ何やら仔細のあるらしひト持つたる盃の酒をグッと飲み干すが「道具替りの知らせ」御座りますナー、と此仕組宜しく賑かなる早唄よて道具ぶん廻す

髯尾やかたの場

本舞臺一面平舞臺。上の方床の間。次よ神棚其下單司の書割下の方半間あさぎの暖簾。表手好き所よ格子戸あり凡て阪町髯尾やあたの体。茲よへら〳〵髯尾美麗なる若附。中村鶴三郎好みの扮裝よて両人巨燵よかゝり鉄瓶よて酒を温め互に盃を取交わゝ居る見得相方よて道具納まる　髯「鶴さん貴主今日よ限つて何で其様よ嚴格ひ顔して居のじやへ何ぞ氣よ癪る事でも有のかいナ　鶴「滿更無ひ事も無ひ奴さ第一御前の不人情が氣よ喰わない　ひげ「オホ……戯氣るのじるよも程がある誰が幾日不人情なふとを　鶴「戯氣るのじやない真實のことよ今更云わひでも分つてるだろうが既よ此前にも二世と契つた己を拘わず紀州の商人で幡多とかパッタとか言ふ青白ひ野郎を喰へ込み近頃ハ又髯附を手よ入れて御妾氣取で濟まして居るとハ余程御前も浮氣性だよ　ひげ「アノ真面目らしひ顔が可笑ーひ　つる「ヘン男一匹馬鹿にさーたと思やア少量ハ可笑しゝろうカイ面白くも無へ　ひげ「イエそうじや無ひが余りポン〳〵も云へまひぞへ第一此你を不人情者浮氣者よーた本人は誰ですへ　つる「己が夫を知るものか　ひげ「ようそんな事が……

…鶴さん貴主と云ふものがある斗りは妾は人よ知れなひ苦勞もするし罪な事なれど若旦那達や髯のあるのを誑したりして心配して居るのよ夫れを貴主よ浮氣とか何とか氣樂な事言われてゝ妾の立行く所が無ひ鶴さんこんな貞實なものが又と有つたら日本が泥龜よなるぞへ

つる「成程そう聞て見れゝや已が悪かつた幾重よも御詫々々だが女房よ浮氣されて此方から謝つてる程な女房よ貞實な者も無かろう

ひげ「フン誰かあんな密柑くさひ紀州男や髯のある老翁に惚氣るものがあるもろかへ

両人「オホ……ハ……

…ト色々仕打ある此内花道より志摩田秋正前通りの扮装よて出になり

秋「今日れ天長節の大紋日殊よ天氣も誂へ向き道頓堀の賑ひも大低の事ではあるまひドレ髯尾の宅へ往つて后で彼方に廻つて見よう、ト本舞臺よ來る髯尾れ足音にて秋正と察し鶴三郎よ一間に這入れと顯よて知らす鶴三郎狼狽たる仕打よて奥へ這入る後へ秋正入來る

ひげ「旦那樣御出なさりませ、秋正思ひ入れあつて

秋「此銚子杯盞ハハヽト粋た同士の差向ひと云ふ御樂み筋だつたのか

ひげ「ゐれ旦那の性の惡ひことと是れ一寸御母アさんの御知合の人が

秋「お母アじや無ひ御前の知合だろう

ひげ「イヽエ旦那女の御方ですゞへ、ト此時下女奥より出で來り

下「アノ鶴の席から迎ひの人が見へました

ひげ「今日は大紋日で幾時もより早く席まで行かねばありませぬ故

秋「ウン已も是から道頓堀の方へ廻つて見よう

ひげ「それでゝ何卒又今晩でも

秋「宜し々々、ト秋正下手へ這入る鶴三郎奥より出で來り

つる「どうだ迎ひの人を使ふた趣好ゝ孔明そこ除げだろう

ひげ「戀の爲めよや出ぬ智慧

も振り出さねばならぬ　うる「隨分心配なものだナー、ト此見得宜しく道具ぶん廻す

松亭奥座敷の場

本舞臺常足の二重。上手違ひ棚床の間好みの軸物あり。下一間交入画入の襖。下手善き所よ建仁寺垣石燈籠松の立樹等あり凡て北の新地料理屋松亭奥座敷の体茲よ志摩田秋正涙花小倡波吉好みの出装にて住まひ居る流行唄にて道具止まる

志「頭梁近頃わ別よ變つた事も無ひかの　波「變つた事と云へば一昨日のへら〳〵小屋の摧落れたのよそ死人も傷我人も澤山あつて大變な事でムりました　秋「實ふ近頃の一大變災じやつたのー　波「時に且那私は夫れよ就きまして チト御願がムります　秋「願ひわ如何樣な事じや「外の事ではムりませぬ何卒貴公樣よはへら〳〵の髭尾を御見切なされて下さりませ　秋「エー何と申す　波「サー斯ふ申した斗りでわ御分りもムりますまい一通御聞きあされて下さりませ、ト寂莫とした相方となり　波「元ト私の生れ故郷は阿州淺川村父親は佐久間仁兵衛と申しまして私の二歳の年とやら母親わ死亡ましたが父親も老朽ちた年でも無ひし殊よ子供の世話に手の入る所から人の勧めで後妻を貰ひ受け一歳余を暮す内后の御母アも懐姙して生み落したわ女ぬ子に繼ぎき中ぬ私より其女の子の可愛ひ所から御母アは何卒ずして私を外に遣り其子お繁よ養子を取り佐久間の跡を繼がさんと思つて居る内父親の仁兵衛わ風邪が重つて死んで仕舞ひ后わ御母アが仕たひ三味遂に私を紀州和歌山の大工濱野と云ふ内に音信不通で呉て仕舞ひ其后は如何なつたか親族も無ひ身とて樣子も分ら

貴私も其儘紀州に於て大工の業を勉強して居る内に今より丁度三年以前私が二十五の時少し仕た事から仲間の者と喧嘩して已に命も危かりしを先達て三濱屋に上まりた播多と云ふ御方に助けられ其の后大阪に出て離縁する内貴公様の御厚負にて今では難渋もせず暮すよつけても國にある妹に如何なつたかと郵便で問合わして四五年前に出て往つて行方知れずと聞り詮方なくて打捨置きたが扨一昨日の四時頃千日前を逍遥つく折柄例の

へら〳〵騒動に出逢ひ痴苦林寺の方から廻つて這入つて見たら即死の者もあり半死半生の御人もあり傷人も澤山あつた所から柱や壁を推し除けて厭された人を助ける内裏手より捨ふたに一個の遊藝櫛札何心なく裏面を讀めば徳島縣阿波國海部郡浅川村百二十番地佐久間繁と記さあり其傍に髪尾と云ふ名が書いてあつた故始めて知つた妹の御繁扨に〳〵の髪尾であつたかヤレなつかしやと思ふにつけ茲に一つの難義と云ふは御恩ある播多の旦那素と和歌山で相當な御暮しなりしも御両親が御死去遊ばし旦那が嫁様を御迎へあさつて跡目を相續あさるゝと間も無く商賣上の取引で大阪に御出でよなり御滞在中髪尾の手管に懸り多分に借債が出來た所から紀州にも歸られぬ仕義となり遂に車夫とまで零落なされた其根本は皆妹又播多の旦那が御國に殘された御嫁様は旦那の跡を尋ねて大阪に出られたれど皆目行衛は分らず路用の金も無くなる〻遂には南で藝妓とならられ乃ち御存じのあの峯吉と云ふのが其御方で内々旦那を探索中御覧の通り先達て三濱屋の前でフト其幅多の旦那に私が出逢ふたので彼の宅の

手座敷で色々と談話中峯吉さんが旦那と云ふ事を知つて私等の間へ這入て來られ御両人共暫時は泪よ沈んで居られしかば私も其心を御察し申し素より恩ある旦那なれば峯吉さんの身を受出して御両人を御世話致すことゝ致しまゝた此一鎖の譯ある故髪尾を妹と知るや否や早速髪尾の宅へ尋ねて行き兄弟の名乘を仕た上此後は決して人を誑ます樣な事をせぬ樣と呉々も意見した處彼も何やら少し改心した樣子併し是迄浮氣な商賣した者故豆腐よ竹を續ひだ樣よ急に堅ふなると云ふ的へ附けられず御旦那に御願へ茲の事聞けば髪尾よ鶴三郎と云ふ情夫があつて幾多の旦那を誑ましたのも其爲よゝた事とやら又甚だ申し憑ひ事でゝムりますが貴公樣にも何やら妹の御世話下さるとの事有難ひと御禮申上げねばならぬ處なれどもそう行かぬゝ貴公樣も一方あらぬ恩義のある御方何卒髪尾の事へ思ひ切りなされて下さりませ既に今日の新聞よもへ〳〵ろ屋根が落ちた時蓄の生へた先生がサ貴公樣でゝムりますが辻車で逃げて去なれたと悪口が書ひてムりまゝた貴公も御名譽を尊びなさる御方殊よ御立派な奥樣も御有りなさるゝ事若し世間で悪評でもする樣よあつてゝ仟恐御爲よなりますまいゝと存じます他人の事なら兎も角も妹と知つた上えなんぼ薄情な女でも悪ひ評判の無かれゝと所るのが親身の情旦那何卒茲の道理を御察し下さりまして私の御願を御聞入れ下さりませ左樣仕ますれば髪尾ゝ奇麗よ鶴三郎よ推し方附けて仕舞ふた上世間に大耻をかゝせあひ樣よゝたひ私の所存彼樣申せば甚だ得手勝手の樣にゝムりますれど決してそうではムりま

ぜん甚だ恐入つた申分ながら是も御旦那の身を思ふての事そうせねば第一奥様よ對して濟みません是非共髯尾の事ハ夢と御流し下さりませ、ト物語の内色々の思入れあり秋正姫終胸よ當ると云ふ思入あつて　秋「アヽ誤つた〳〵今更後悔貴様が居なかつたら已れハ段々〳〵迷の路を分け入つて位置も人望も又財産も失ふ所髯尾の事は此後吃度思ひ切つたゞ　波「そりや思ひ切り下さるの有難ふムります夫でこそ御身の爲め就てハ夫れや是れやの祝を兼ね今宮商業倶樂部の新御殿よ於て宴會を開きませそれば其節ハ御參會を御願ひ申し幡多の旦那夫婦其他皆々へ改めて御盃を下さります様御願申しあけます　秋「オヽ其儀も承知致シた已も今日ハ胸中快然として來た是も其方の御庇蔭と申すものサヽ波吉目出度ひ飲め〳〵　波「遠慮あしに頂戴致シ

まそト、此時仲居銚子を以て出で來り両人酒を飲む此見得宜しく黒幕を卸す

道具出來次第黒幕を切つて落すと作り物總て商業倶樂部の遠見奇麗なる平舞臺幕の内より志摩田秋正幡多助三郎浪花小僧波吉藝妓峰吉今そ幡多の女房御峰中村鶴三郎へら〳〵髯尾今は鶴三郎女房御繁皆々〳〵綺麗なる出装よて立懸り居る此見得宜しく賑のなる唄よて道具納まる

東西々々此所愈々新作へら〳〵騒動懺悔踊別嬢總出にて御覧よ入れます此藝相濟みまそれを二錢持つた人は後よ殘り持たない人ハ一回の入れ代り――カ

チ〳〵

二挺鼓のはやしよて揃ひの踊一曲舞ふ事あつて　秋「迷ひの夢も今醒めて　助「再度盛ふ歸り花　波「目出度祝ふ盃よ

蜂「過ぎよし事い打捨てゝ　鶴「新よ結ぶ親みれ、　ひげ「千秋萬歳　皆々「萬々歳ト、此見得宜しく目出度く打出し

明治二十二年十二月二十一日印刷
仝　年仝　月廿二日出版
大坂市西區新町南通四丁目百十八番屋敷
發行兼編輯者　玉置大三郎
大坂市東區高麗橋五丁目九十四番敷屋
印刷者　進藤佐一郎
大坂市西區新町南通四丁目百十八番屋敷
發兌所　筆鋒社

091349-000-9

特49-233

へらへら草紙

暁山人／著

M22

DBN-2243